

## 『玄同放言』

江戸後期の考証随筆。3巻6冊。滝沢瑣吉（曲亭馬琴）著。琴嶺・渡辺崋山画。天然・人事・動植物について、和漢の書から引用し、考証を加えたもの。題名の「玄同」は無差別の意。本書に掲載されている雷獣図は、今回別に紹介する『北越雪譜』の著者鈴木牧之が馬琴に送ったものだという。牧之は当初、『北越雪譜』出版のために馬琴を頼っており、馬琴著、牧之考訂となるはずであった。そのためこの『玄同放言』の中で牧之に言及し、巻末には出版予定として『越後雪譜』の名前で広告も出している。しかし、実際には馬琴多忙のため実現せず、『北越雪譜』として別に出版されたという経緯がある。

### [参考文献]

玄同放言 日本随筆大成第1期 5 / 滝沢馬琴 : 吉川弘文館, 1975.6

914.5/21(1)/5 0075101274

校註北越雪譜 / 鈴木牧之[著] 井上慶隆, 高橋実|校註: 野島出版, 1979

914.5/24 0080100049

“げんどうほうげん【玄同放言】”, 日本国語大辞典, JapanKnowledge,

<http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-25)

# 玄同放言①

## 第四天象 雷魚雷鷄雷鳥 並異形雷獸図

雷が落ちる時、それと一緒に駆け下りてくるといわれた動物で、その爪跡が落雷した立ち木に残っているなどといい伝えられている。江戸時代の随筆や近代の民俗資料に多く見られ、土地によっては落雷とともに落ちてきた雷獣のミイラを伝える寺院もある。雷獣の特徴は文献によってまちまちで、『玄同放言』では形は狼のようで前脚が二本、後脚が四本あるとか、『駿国雑誌』では後脚に水掻きがついているなどとある。『信濃奇勝録』には、立科山は雷獣が住むので雷岳ともいうとあり、雷獣の形は子犬のようで、毛は貉(むじな)に似ており、五本の爪は鋭く鷲のようである。冬は穴をうがって土中に入る。故に千年もぐらともいうとある。『斉諧俗談』では、下野国烏山(現栃木県那須郡烏山)の雷獣はイタチより大きな鼠のようで、四本足の爪はとても鋭いとある。夏の頃、山のあちこちに自然に穴があき、その穴から雷獣が首を出して空を見ている。雷獣は夕立雲を見ていて、自分が乗れる雲を見つけるとたちまち雲に飛び移るが、そのときは必ず雷が鳴るなどと記されている。これらの雷獣の特徴を簡単にまとめるならば、二尺前後(約60センチ)の子犬、または狸に似て、尾が七、八寸(約21-24センチ)、鋭い爪を有する動物ということになるだろうか。